

日本語における畳語複数形の生成可能性について

松本純一

要 旨

本論文は、日本語における畳語複数（同一の名詞を二度くりかえすことによって複数をあらわす造語法）の成立条件について検討し、あわせてその生産性の問題に関して私見を述べようとするものである。

1. 日本語の畳語複数形

日本語は、畳語（重ね言葉）を多用する言語である。母語を習得途上の幼児ならばいざ知らず、成人の言語において、これほど普通に畳語が多用されるということは、少なくとも西欧語などと比較する限りにおいて、かなり特徴的な現象であると言っても過言ではなかろう。

畳語とは、国語辞典の定義によると、次のように説明されるものである。

じょうご【畳語】

同一の単語または語根を重ねて1語とした語。

「我々」「くろぐろ」「ひらひら」の類⁽¹⁾。

畳語の中で最も広く頻繁に用いられるものは、おそらく「ひらひら」「どんどん」「ますます」等々の、副詞的な用法のものであろう。しかし本論ではそのような種類のものはさておき、ここで畳語複数と呼ぶ種類のものについて考察していきたいと思う。畳語複数とは、同一の名詞をふたつ重ねることで、その指示対象が複数存在することを意味するもので、「人人」「木木」「山山」などがこれにあたる。これらの表現が、本当に西欧語の名詞複数形などと同等のものであるかという点に関しては、さまざまな議論が予想されるが、ここでは便宜上、複数とか複数形とかいう用語を使用することにする。また、これらの畳語複数形を表記するに当たっては、先の国語辞典の用例中にあるように、「我々」のような繰り返しを示す特殊文字「々」などを使用するのが標準的かと思われるが、ここでは語形成をより明確にするために、あえて「我我」「人人」のように、同一文字を二文字重ねた、いささか拙い表記法を採用することとする。

2. 畳語複数形の実例とその形態的特徴

ここで、おもな畳語複数形の語形を、そのあらわすものの種類に応じて分類して、いくつか列挙しておこう。

(1) おもな畳語複数形の実例：

①人間や生物、あるいはそれに類するものをあらわすもの

「人人」「木木」「神神」「各各」「我我」など

②無生物や自然現象をあらわすもの

「山山」「峰峰」「家家」「村村」「国国」「品品」など

③年月や時間的・空間的概念をあらわすもの

「日日」「月月」「端端」「隅隅」など

畳語複数に関して興味深いのは、日本語にはせっきこのような便利な表現が存在するにもかかわらず、その使用範囲が非常に限定されているという点である。たとえば「人人」とは言えるが「犬犬」とは言わない。「木木」とは言うが「草草」とは言わない。「山山」とは言えるが「川川」とは言わない、等々である。ただし、本当にこれら各々の対において、後者の言い方が絶対に不可能であるのか、という点については、この論文の主要なテーマのひとつとして後述することになる。

これら畳語複数形の成立の条件に関しては、古くからさまざまな考察がなされてきた。まず、発音や文字表記等、これら畳語複数の形態的性質に関しては、誰が見てもかなりはっきりした特性が見取れることは明らかであろう。すなわち、次のような特性である。

(2) 畳語複数形の生成が可能な名詞の形態的特徴：

①漢字で表記した際、一文字で表せる名詞である。

②漢字の読み方としては、訓読みの発音が採用される。

③発音した際、一音節か二音節で発音できる、短い語である。

④連濁が可能な際には、通常原則どおりに連濁が起きる。

これらの形態的条件が満たされない畳語複数形の場合、それが妥当な表現として容認されることは、ほぼ完全にありえないと言ってよい。

3. 畳語複数形成立の条件に関するさまざまな提案

しかしながら、これら形態的条件だけでは不十分であることは、誰の目にも明らかであろう。上記(2)に挙げたような形態的特徴を持ちながら、畳語複数形を許さない例が、いくらでも存在するからである。そこで、どのような場合に畳語複数形が許されるのか、その意味的条件、あるいは心理的条件

とでもいうものが検討されることになる。主なものとして、次のような説がありうるだろう⁽²⁾。

(3) 畳語複数成立の条件に関する諸説：

①擬人化説

畳語複数は、基本的には人間に関して用いられるものであり、それ以外の語の場合はそれぞれの対象を擬人化した表現だと考えられる。

②尊敬・敬愛説

畳語複数が用いられるのは、その対象に対して尊敬や畏怖の念、あるいは深い敬愛の念などが込められた場合である。

③連続性重視説

畳語複数で表される対象は、何らかの意味で「連なり」を感じさせるものである。

これらの諸説のいずれもが、畳語複数の性質の一端をかなりの確にとらえていることは確かだと思える。しかしそれと同時に、どの説にもいまひとつ納得がいかない、不満足な印象が残ることも事実だと言わざるを得ない。はたして、ここに挙げた説を凌駕するような新たな説が提案できないものであろうか。それが本論文の主な目的である。

4. 畳語複数形は生産的か

さて、これまで、畳語複数は極めて限られた種類のものだけが使用可能であり、それ以外の、たとえば「犬犬」「草草」「川川」などは、いかなる状況においてもまったく受け入れられない表現である、という前提に基づいて議論を進めてきた。しかしながら、私はこの前提に大きな意義を挟むものである。

たとえば、「花花」や「星星」という表現は、一般には容認不可能な表現とみなされることも多いようであるが、私にはたとえば「花花が咲き乱れる草原」「星星がきらめく夜空」のような表現は、まったく自然なもののように感じられる。また、かつて恩師や同僚との個人的談話でこの問題が議論されたとき、私は「魚魚（うおうお）」や「鳥鳥（とりどり）」という表現が、いささか特殊ではあるが十分に可能な表現のように思える、と述べたことがある。その際に私は暫定的な説明として、自分は幼いころから魚類や鳥類にかなりの興味と愛着を持っているので、そのように愛着のある対象に関しては容認可能性が高まるのでないかと、第3節の分類における(3)②の敬愛説のような説明法を試みた記憶がある。

第2節で述べた形態的条件に反するようなものが容認できないことは無論として、その他の場合にこのように母語話者の間でも、容認可能性の感覚にかなりの不一致が見られるということは、大変興味深い現象であり、畳語複数の成立条件を考察する際に重要な要因となる可能性がある事実である。

5. 生産性に関する管見

ここで少し本題から話を発展させて、形態論や統語論における生産性(productivity)あるいは創造性(creativity)の問題について私が日常感じていることを述べてみたい。よく知られているように、現代言語学の多くの学派では、人間の言語は本質的に生産的・創造的であるという前提に立って、そのような現象を支配する規則なり原理なり説明法なりを追究する、というのが基本方針のひとつとなっている。すなわちわれわれ人間は、これまで一度もそのままの形では見たり聞いたりしたことのない言語表現であっても、それが自分の母語の正しい言語表現であるかどうか、そしてその表現がどのような意味を持ちうるかということに関して、原則として正しい直感をはたらかせることができる、というわけである。

私は言語学を専門に学んだ研究者であるからといって、この生産性・創造性という特質を過剰に評価しているつもりは、少なくとも自覚的には、ない。むしろ、生産性・創造性に関して、直感的になるほどと納得できたからこそ、現代言語学を専門にするに至った、と言うべきであろう。

しかしながら、たとえその言語の母語話者であったとしても、私の場合のようにその生産性や創造性に関して寛容である人ばかりとは限らない。むしろどちらかと言うと、多くの母語話者は、これまで一度も聞いたことのない表現にはかなりの拒否反応を示すことが多いようである。言語学者でない一般の人々は、言語理論や文法規則などを念頭において容認可能性の判断を下しているわけではないことは勿論であるが、言語学者が暗黙の内に期待している以上に、これまで学校で教わったり、その他何らかの機会に見たり聞いたりしたことがあるかどうかという要因を、判断の拠り所しているようである。

私の個人的体験から実例を挙げてみよう。以前私は、「走りに走る」「凝りに凝る」のような、《動詞連用形+に+動詞終止形》という形をした複合表現の生産性に関して、同僚や家族と議論をした経験がある。私は、この形式は完全に生産的であり、たとえば「座りに座る」「選りに選る」(後者の場合、ここでは「えりにえる」と読むものとする)のような、たとえ一度も聞いたことのないような表現であっても、適当な文脈さえ与えられれば十分に容認可能であると主張したのだが、聞いたことのない形は認め難いと反応する人も多かった。また、言語学や英語学の入門書などでしばしば取り上げられることの多い、ある言語表現が二通り以上の意味に解釈できる、いわゆる曖昧性の現象なども、単語レベルのものとはかくとして、文レベルのものは、実際の使用においては必ず音調や文脈によって判断されるのだから、そのような現象自体その存在を認め難いといった趣旨の意見を持つ向きも多いようである。

同じ地方で生活し、同じ家庭に住んだり同じ職場に勤めていたりして、かなりの生活時間を共有している母語話者のあいだでさえ、このように言語に対する感覚にかなりの差があるということが、言語に関する研究や教育の困難さを物語っているように思われて、思わず考え入ってしまった次第である⁽³⁾。閑話休題。量語複数形の分析に戻ることとしよう。

6. 畳語複数形成立の条件に関する新しい提案

それでは、以上に述べてきた生産性に関する見直しを受け入れたとした上で、畳語複数が使用可能な場合とそうでない場合とを区別する、なにか新しい着眼点はないものであろうか。

もしかすると私たちは、第3節(3)のような条件を考察する際に、あまりにも畳語複数によってつくられた語や、そのもとになる個々の名詞の、いわゆる意味的・指示対象的側面や、ニュアンスのようなものにとらわれ過ぎてはいなかったらうか。形態的側面と意味的側面の、いわば中間の道を行くことにして、語彙構造的な観点からこの現象を見直してみてもはどうだろうか。

そこで、次のような疑問を発してみてもどうだろうか、「畳語複数を構成する各名詞に関して、その上位概念になる語が容易に考えられるだろうか」と。ただしここで言う上位概念とは、意味論でいう上位語/下位語の関係(hyponymy)とは異なるし、しばしばそれと混同されがちな部分/全体の関係(part-whole relationship)とも異なる⁽⁴⁾。それらのような厳密な意味論の関係ではなく、もう少し緩やかな意味での集合的あるいは空間的上位概念のようなものが、畳語複数の名詞に関して容易に想起できるかどうかを考えてみたい。そうすると、畳語複数形がごく普通に容認できる場合には、必ずといってよいほど、このような上位概念が存在することが前提になっているように思われることがわかってくる。

第2節(1)で挙げた、典型的に容認可能な畳語複数に関して検討してみよう。もっとも明白なのは「木木」と「国国」であろう。これらの表現を聞いたとき、私たちはただちに「森の木木」「世界の国国」といった表現を思い起こすことだろう。つまり「木木」とは、何でも良いからたくさんの木をあらわすというわけではなく、ある決まった範囲の森などを構成する一本一本の木、という意味なのである。「国国」とは、適当に任意のいくつかの国を指すのではなく、この世界、この地球を構成する要素としての一つ一つの国家、あるいはもっと狭い範囲で用いる場合には、ある地理的・政治的条件などを満たす集合の中に含まれる個々の国、という意味なのである。「東アジアの国国」「社会主義の国国」「イスラム圏の国国」などというふうに。

また、「人人」や「神神」に関しても、同様のことがいえる。私たちが「人人」という表現を取って使用するとき、漠然とたくさんの人間という意味で用いるのではなく、もっと具体的にある決まった集団内の個々の成員をイメージしているのが普通であろう。つまり「世界の人人」「日本の人人」などのように「～の人人」という形で用いられるのが普通であろう。また「神神」という言い方が使われる場合には、「ギリシャ神話の神神」とか「八百万の神神」のように、ある特定の宗教的世界が前提となっている。

このような解釈を拡大してゆくと、他の例に関しても、多かれ少なかれほぼ同様の説明が可能のように思えてくる。「山山」や「峰峰」は、ある一連の山脈なり山地なりを構成する個々の山を指すのが普通であろう。この点に関しては、連続性重視説の指摘があたっていたわけである。これに対して「川川」や「海海」などという言い方が普通許されないのは、複数の川や海が融合してある主の集合体をなすという状況が考えにくいからであると説明できる。「村村」や「家家」に関しては、それぞれある

一定地域の中に含まれるいくつかの村や家を指すものと解釈される。これに対して、たとえば「町町」という表現が容認しがたいのは、いくつかの町が集まってひとつの共同体をなすという状況が、地理的・政治区分的には存在してはいても、私たちの日常的な実感としてとらえ難いからであろう。

「月月」「日日」などの時間的表現に関しても、同様の説明が可能である。「月月」は、たとえば「月月のローンの支払い」などというふうに使われるが、これはローンを組んでから完済するまでの特定の期間が念頭に置かれている。また「日日」は「楽しかった学生時代の日日」のように、ある一定の時期を構成している一日一日、という場面で使われるのが典型的であろう。「月月」「日日」に対して、「年年」（この場合は「ねんねん」ではなく「としとし」と読むものとする）という表現が普通だと感じられないのは、何年間かの年を包括する一定の期間というようなものが考えにくいからであろう。

物や場所の表現である「品品」「端端」「隅隅」なども同様である。「品品」という表現は、ある店先に並んださまざまな商品とか、何かの祝い事などであちこちから贈られたさまざまなプレゼント、という状況を思い浮かべるのが普通であろう。また「端端」や「隅隅」は、言うまでもなくある特定の物体や事柄・発言などのあらゆる部分、という意味で用いられる。

第4節で述べたように、私は「花花」はまったく自然な表現として容認できると感じるが、これはたとえば「自分の家の庭に咲く花たち」とか「ある花壇の中に咲いた花たち」のように、一定の空間的範囲が容易に想定できるからである。しかしそれならば、同様の理由で「草草」も言えそうなものである。こちらは私の感覚でも、よほど特殊な場合でない限り言えないであろうと感じられる。この両者の差異の理由としては、次のようなことが考えられる。つまり花というものは、さまざまな種類のもものが集まって咲いていれば、普通私たちの誰でもが「ああ、たくさんのいろいろな種類の花が咲いているな」と感じる。ところが草に関しては、特に植物に興味がある者でない限り、そこにどのくらいの種類の草が混じって生えているのか、ということにあまり関心を持たない。このことから、量語複数に関して結論できるもうひとつの性質が出てくる。量語複数は、それを構成する個々の成員の種別や個性に私たちの注意が向いているときに、使われやすくなるものと考えられる。第3節(3)①の擬人化説がある程度正しいように思えるのは、私たち人間がその個性に着目しやすい対象の最たるものが、ほかならぬ人間であるということによるものであろう。

私は以前、「魚魚」という表現がまったく普通とはいえないまでも、充分ありうる表現だと述べたことがあると上述した。私のこのいささか特異な感覚に関しても、次のように説明することが可能になってくる。すなわち、幼いころ海辺で育ち、週末には必ずといってよいほど家族や友人と近くの砂浜や岩場で海遊びを楽しんでいた私にとっては、「魚」といえばすぐにそれを包括する場面としての「海」が思い浮かび、自分が冷たい海の水に足をつけて、足元を泳ぎ去っていく沢山の魚達のが生き生きと思い出される。そして私は魚に興味があったから、魚の種類の違いにもおそらく平均的な日本人以上に敏感であった。そのような条件がそろった結果として「ある特定の場面に含まれる、沢山の対象を、その個性に着目しながら述べる」という規定がみごとに満たされることとなり、私に「魚魚」という表現を容認可能と感じさせるに至ったのであろう。

このように考えていくと、「魚魚」だけでなく、「草草」「犬犬」等々、普通には容認できないと思われる多くの言い方も、状況によってはある程度容認可能性が高まるのではないかと予測することができる。実際、私はそのとおりであろうと思う。たとえば、「犬犬」という表現を取り上げてみよう。普通にはこの表現は受け入れ難い日本語表現と感じられるが、それは複数の犬をある特殊な状況の下に一定の概念に包括するという機会が比較的少ないからという理由に過ぎないと考えることができる。逆に言えば、そのような条件がそろいさえすれば、「犬犬」という表現もかなりの程度に容認可能になるのではなからうか。そういえば私が若かりし頃夢中になって観た映画に、人間の言葉を解する犬とその飼い主である少女との物語があった⁽⁵⁾。その映画の終わり近くにあるクライマックスシーンに、主役の犬とその仲間の犬達（犬種は実に多種多様であった）が、町内のあちこちから集まってきて、誘拐された少女を助けるためにひとつの大きな流れとなって街道をひた走っていくという描写があった。この場面などは、まさに「少女を助けるために、町中から集まってきた犬犬がひた走りに走って…」などと表現するのにふさわしい場面であった。

7. 総括

以上の考察の結果として、次のような結論を提示できるものと思う：畳語複数形が可能になるのは①そのものが複数存在し、②それらのものを何らかの意味で包括する上位概念あるいはある限定された場面が存在し、③その中において個々の成員がその個性を認められ個別的に指示される場合である。そして④畳語複数形は、これらの条件ならびに発音上・文字表記上の形態的条件が満たされる限りにおいて、原則として生産性を持ちうるものであり、必ずしも語彙的に限定された種類のものしか使用が許されないというわけではない。

もし私が、英語話者から質問を受けて、日本語の畳語複数のあらわす意味を問われたとしたならば、たとえば次のようにでも答えることになることだろう：

“In general, such expressions designate each member of a certain specific group”.

注

- (1) 『広辞苑』第五版（岩波書店）の定義より。
- (2) ここに挙げた諸説は必ずしも私のオリジナルなものではないが、これらの説のほとんどは個人的談話もしくはそれに類する方法で得られた情報であり、残念ながら辞典を正しく明らかにすることは極めて困難である。
- (3) 本節で私が述べたのと同様のことを、生成文法の枠組みからより洗練されたかたちで論じたものとして、上山あゆみ（2008）「生成文法では何をデータとして扱うべきか」『言語』（大修館書店）Vol.37 No.11 pp. 48-53などがある。
- (4) hyponymy や part-whole relationship に関する詳細な定義や解説については、John Lyons (1977), *Semantics*, vol.1, Cambridge University Press をはじめとする、構造的意味論の諸著作を参照されたい。
- (5) 『ドン松五郎の生活』（1986年東宝）。原作は井上ひさしの小説（1978年新潮社）である。

